

深華

想起をテーマとしたコラグラフの版画技法による表現

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2024年3月修了

浦脇駿

主査 渡抜亮 副査 Robert David Platt 国本泰英

研究背景

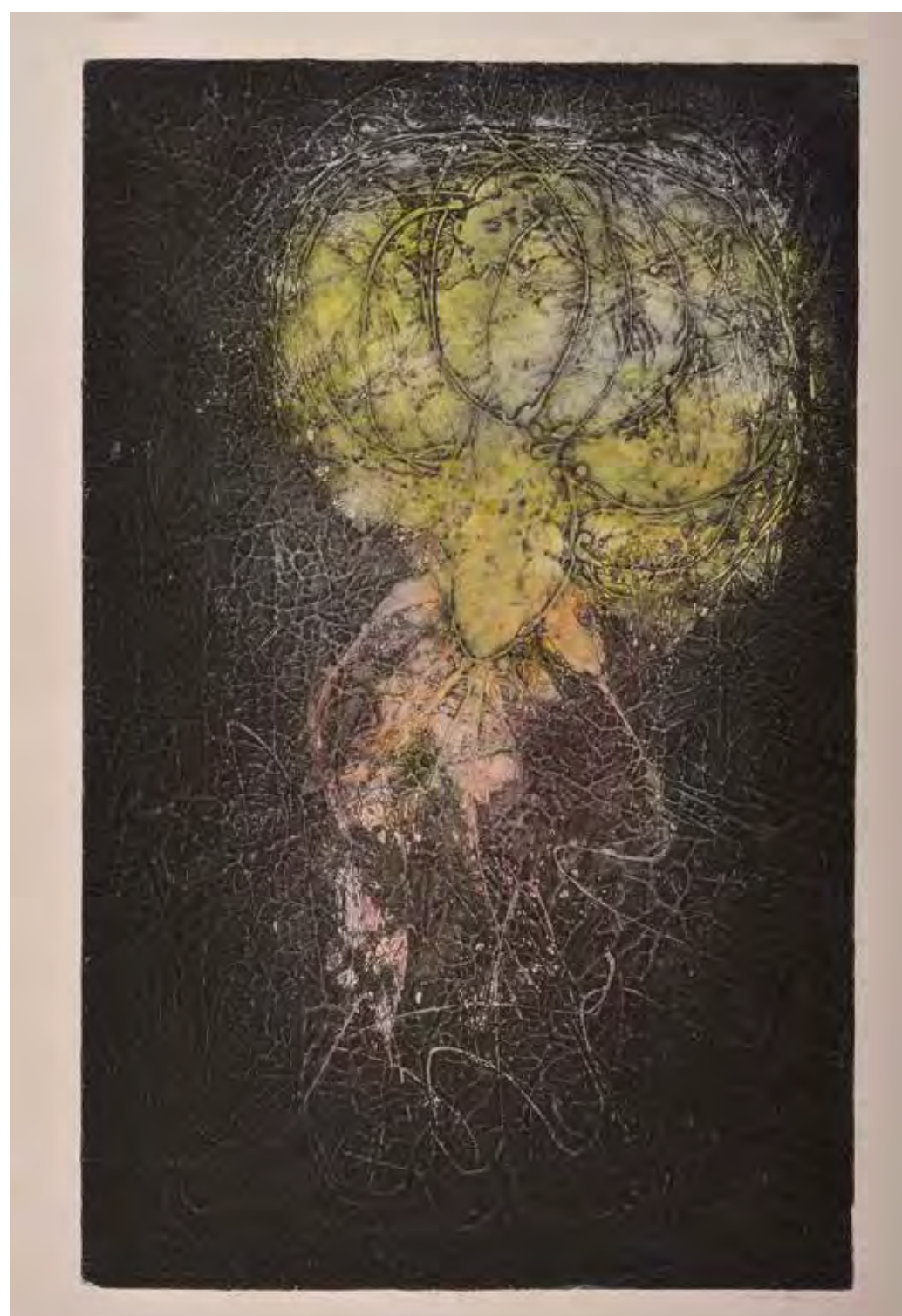
『想起』というテーマから、人生での経験や思い出を作品の形として、残していきたいと思いこのテーマでの作品の制作をはじめた。この思いは、これまでの人生の中でのペットのハムスターとの思い出や生き物ならいづれくる死というものにより、そのペットというのを失うということである。また、時間が経っていくに連れて、ペットの姿が画像や動画でしか、思い出すことができないといったことから喪失感や様々な感情が現れた。これまでの私自身の経験を忘れないようにしたいと考え、研究をはじめたのである。

研究目的

『想起』というテーマでの内容は、記録のようなものからはじめた。制作した作品を見て、何が見えているのか、どう思うのかと人それぞれ異なっている。思い出や大切な人とのことや様々な感情を引き出し、他の人とどんなものが見えたか、どういふことを感じたのかと話すきっかけになればといった狙いがある。

この三つの画面を持つ『深華』は、クラゲや泡といったものを私の時間を写真のように切り取る。クラゲは私にとっては不気味であり、綺麗なものと様々な感情を持つものであること、クラゲの一生が植物の成長に近いものとして、つぼみから華のような変化していく姿を画面にしたものとなる。題名となる『深華』の漢字については、心や記憶を海に見立てることを意味している。その海の深く深海のような、光が届かない暗闇の中で咲いている華。その華は、過去の記憶の底から思い起こすといった意味を持つ。

研究概要



成果・まとめ

『想起』というテーマは、幅が広く一つの媒体では、表現するのは難しい内容だったが、私の大学の4年間と合わせた経験、ペインティングや写真や版画表現を通して、今回の私にあったテーマの表現に合うものになった。今回の作品の形にするために、これまでに経験してはなかった版画の技法であるコラグラフを選択し進んだこと、様々な人たちと対話と多くの人の手助けをいただきながらこの作品またテーマが結果としてカタチにすることができたと思う。



指導教員コメント

浦脇作品はこの2年で大きく成長を遂げた。コラグラフ技法の可能性と全力で対峙し、自身のテーマを技法を取り入れながら深掘していくことで、最終的な修了制作では独特のダイナミズムを獲得している。紙作品でありながら、レリーフ上に大きく立体化したマチエールは見事であり、浦脇さんの言葉を借りるなら“鑑賞者によってさまざまな想起をしてもらえる”作品であるといえる。まさに本作品は、鑑賞者によって禍々しくも、神々しくも映る大らかな存在を放つ作品となった。

渡抜亮